

平成一六年六月十三日
吉野櫻雲

《『日米両国民に訴へる』の部分的まとめと小生の感想》

評論『日米両国民に訴へる』(昭和四十八年十一月～翌年二月) から
——「ベトナム戦争」、その本質論と「イラク戦争」との関連——

~~~~~

### 参考:【ベトナム戦争】(大辞泉)

ベトナムの統一をめぐる戦争。一九六〇年(昭和35年)に結成された南ベトナム解放民族戦線が、六一年、北ベトナムの支援のもとに南ベトナム政府に対して本格的な抗争を開始し、六九年には臨時革命政府を樹立。その間、六三年にはアメリカが全面的に軍事介入したが、七三年(昭和48年)の和平協定により撤退。七五年、サイゴンが陥落して南ベトナム政府は崩壊。翌七六年、南北ベトナムの統一が実現した。第二次インドシナ戦争。七四年、ウォーターゲート事件

---

(以下、『日米両国民に訴へる』の部分的まとめを含めて)

何が、ニクソンをしてベトナム戦争終結に追ひ込んだのか

《全能のアメリカと退廃的孤立主義》について P 6 4

\*アメリカの二面性・・・1. 自由世界の戦略本部としての自覚を持つた戦後のアメリカ。(パックスアメリカーナ)

(P 1 1) 2. 孤立主義に復帰しようとする伝統的なアメリカ。

(「全能のアメリカと退廃的孤立主義。その両極のいずれかに狂奔し易い国民性」が米国の根底にはあると) P 6 4

《何故「アメリカはヨーロッパに対して孤立主義的態度を取り、アジアに対してはさうではなかつた」(ウォルター・リップマン) か》

恒存は言ふ。「それはヨーロッパが自立出来、全体主義に対抗し得る自由の精神を持つてゐるからであり、その点では両者の間には連帶感が成立してゐるからに他ならない。が、アメリカはアジアの自由主義にも民主主義にも信頼感を持つてゐない。アジアへの介入も撤退もその結果として生じたものに他なるま

い」と。P 51

## 重要点

《ベトナム戦争時の米国知識人（殊にリベラル）の共産主義感》・・・それは、日本の進歩的知識人にも共通するもの。（P 66～P 70）

\* 共産主義が持つ国際主義（インターナショナリズム）に、先進性があると言ふ幻想。

それが齎す形式と実体の混淆（P 69）・・・

\* 「幻想」優先による、形式の放棄。

即ち、形式=言葉・思想・哲学=アイデアリズム（理想主義）：自由世界=全能のアメリカ（パックスアメリカーナ）

\* それが、実体=現実？=孤立主義（ニクソン・ドクトリン）を齎した。

当時（昭和四十七年頃：ベトナム戦争末期）、アメリカには形式と実体との混淆現象があつた。

共産主義に先進性があると言ふ「形式=言葉・思想・哲学」上における幻想が、現実（実体）に影響し、「自由世界」と言ふ言葉がタブー化し「非共産主義国」と呼ぶ方が一般的になつてゐた。即ち形式に対する幻想（「先進性」）が実体（現実：反戦気分と言ふ現象化として）を支配し始めてゐた。

さうした気分が、ニクソンをしてベトナム戦争終結に追ひ込んだと以下のように恒存は言つてゐる。（参照：P 44「ニクソンをしてベトナム戦争終結に追ひ込んだのは、外よりは内部の反戦気分、それによつて醸成された国内不安、又その原因となつたアメリカ人の生命の犠牲と戦費増大に伴うドル危機であつた」）

とは・・・リベラル（民主党系）の幻想→リベラル系新聞（ニューヨークタイムス・ワシントンポスト）→世論（反戦気分）

と言ふ流れなのであらうか。

## 共産主義に、先進性があると言ふ幻想とは

当時、米国知識人の「最も重要な関心事は共産主義の現実を公正に観測、批判するといふ事ではなく、自分が共産主義に対して無理解な人間ではない事を自他共に示す事によって、自分の進歩性、即ち知識人の資格の保持者であるといふセルフ・アイデンティフィケイション（自己証明）を行ふ事」になつてゐた。

その原因は「ロシア革命が成功し、社会主義、共産主義のモデル国家が出

現して後、そしてそれがアメリカに対抗し得る軍事的超大国になつて以来、共産主義国の方が資本主義国より先に進んでゐるといふ観念が彼等の心を暗々裏に支配し始めた」からである。

更に、共産主義の国際主義性に「匹敵し得るものが今日の自由世界には何処にも無い」といふ当時の状況故に、米国知識人は共産主義の国際主義に先進性を見、効し難い魅力を感じそこに幻想を抱き、それに自己を合せる事によつて自分の進歩性、即ち知識人の資格のアイデンティフィケイション（自己証明）を得ようとしてゐたのであると。このやうに恒存は言ふ。

米国リベラルや日本の進歩的知識人には、共産主義のインターナショナリズムに対抗する「自由世界といふ国際主義的連帶感」（P71）即ちニューインターナショナリズム（『アメリカを孤立させるな』より）の自信が無かつたのであると。

その為に「退嬰的孤立主義」に陥り、もろくもアメリカの二面性の一つ「パックスアメリカーナ」の側面が、そこでは崩れ落ちたといふことであらう。

以下は当評論より遡る事八年前の評論『アメリカを孤立させるな』における恒存の論評である。そこではかう述べてゐる。

「共産主義のイデオロギーに対して欧米の伝統であるアイデアリズムが挑戦してゐる、それがヴィエトナム戦争の現実だ」と。そして

「共産圏のインターナショナリズムが一つのイデオロギーを以て人為的に世界を統一しようとしてゐるのに反して、アメリカのニューインターナショナリズム（「平天下」：発表者注）は、たとへ前者に対抗して出来たものにもせよ、本質的にはヨーロッパ共同体から自然発生的に生じ、一筋の歴史の先端に芽を出して來たものであります。アメリカ人はそれに自分達の過去の歴史を賭けてゐると同時に、その延長線上に広義の近代化と言ふ実験を賭けてゐるのです」と。

この事はどう言ふ意味を持つてゐるのだらうか。恒存の論考は、二つの評論で何を指し示してゐるのであらうか。

結局アメリカはベトナム戦争において、「共産圏のインターナショナリズム」の先進性と言ふ幻想に、「欧米の伝統であるアイデアリズム」即ち「ニューインターナショナリズム」が遅れを取つた。或は負けたと言ふ事を言つてゐるのでは。

そこから導き出された教訓が「全能のアメリカと退嬰的孤立主義と、二つの相反する傾向を内に含んだニクソン・ドクトリン固有の逆説」と言ふ事か。（『日米両国民』 P138）

その逆説的内容とは、かくの如しだと恒存は言ふ。

「アメリカは同盟国を必要としないのではない。共産圏と対決するアメリカの脚を引張る様な同盟関係はお断りしたい。さういつまでも「肩代り」を続けてはゐられないと言つてゐるだけであり、それは至極当然な申出に過ぎない。『自国の防衛は出来る限り自国で当る』と言ふのは人類普遍のとまで言へなくとも国家存立の為の普遍の原理であつて、この様な常識を改めて確認する為にニクソン・ドクトリンを必要としたといふ事のうちにニクソン・ドクトリンの、いや、更に根本的には、戦後政治の、そしてその中で演じて来たアメリカの役割の逆説があると言へよう」。

とは、「ニクソン・ドクトリン」で孤立主義を演じようとしながら、反面にて「パックスアメリカーナ」としてのアメリカの役割の必要性を認めさせようとする「逆説」と言ふ事か。

そして上記の「アメリカの脚を引張る様な同盟関係はお断りしたい」は、今日の「イラク戦争」に通用する課題であり得る。此處でも「戦後政治の、そしてその中で演じて来たアメリカの役割の逆説」は適用されるのである。

イラクで、国益と「パックスアメリカーナ」を演じて来たアメリカは、現在同じ局面に立たされてゐると言へる。「アメリカの役割の逆説」を再び此處で演ずるかどうかの選択を。即ち孤立主義のカードを見せながら、パックスアメリカーナへの同盟の必要性を自由主義同盟国に迫ると言ふ、「逆説」的演戯を選択しようとしてゐるのであらうか。又はせざるを得なくなつてきてゐるのであらうか。

ここに、冒頭表題の「『ベトナム戦争』、その本質論と『イラク戦争』との関連」が読み取れるのである。日本を含めた同盟国はどうそれに対処するかがこれから問はれる事になる。イコールパートナーシップとして「アイデアリズム」に附き合ふか、それとも「脚を引張る」かが。根底に国益があるのは当り前の事として。

以下の福田恒存の文に、示唆してゐる事の重要性があると小生は思ふ。

~~~~~

《以下は、小生HPからの部分的転載を含む》

《参考》・・・『アメリカを孤立させるな』昭和40（1965年）年7月 より

内容：ヴィエトナム戦争についての見解（『福田恒存全集六：P139～140』）

* ヴィエトナム戦争は「ヴィエトナムをテストケースとして二つの筋が争つてゐるのです。(中略) さう名附けたければイデオロギー戦と言つても宜しいが、これは左翼用語であつて、伝統的な用語法に従へばアイデアリズム(理想主義)の戦と言ふべきでせうが、いや、もつと正確に言へば、共産主義のイデオロギーに対して欧米の伝統であるアイデアリズムが挑戦してゐる、それがヴィエトナム戦争の現実だと言ふ事です。

(中略) それと関連して第二に、アジアは一つではないがヨーロッパとアメリカは一つだと言ふ事です。それらの国々は過去に同一の文化共同体に属し、一つの歴史を共有してゐると言ふことです。共産圏のインタナショナリズムが一つのイデオロギーを以て人為的に世界を統一しようとしてゐるのに反して、アメリカのニューインタナショナリズム(「平天下」:発表者注)は、たとへ前者に对抗して出来たものにもせよ、本質的にはヨーロッパ共同体から自然発生的に生じ、一筋の歴史の先端に芽を出して來たものであります。

アメリカ人はそれに自分達の過去の歴史を賭けてゐると同時に、その延長線上に広義の近代化と言ふ実験を賭けてゐるのです。もし世界連邦と言ふものが考へられるなら、この線に沿つてしか求められませんまい。(中略) 私は私の、といふより過去百年西洋文化を攝取して來た私達の文化感覚によつてそれを採るといふだけの事です」

……福田恒存は既に約40年も前に、現在に通ずる「パックスアメリカーナ(平天下)」の意義を、広義的な世界連邦と言ふ意を用ひてその必要性を認めてゐるのである。当然米国の行為をただの自己犠牲だけとは見てなく、その事を「一体どこの国が国家利益を犠牲にしてまで他国に奉仕するでせうか」と、アメリカの行為を「他者愛と自己愛(国益)」の西欧の伝統的二元論の延長として見事に論じてゐる。

そして日本の採るべき道を「過去百年西洋文化を攝取して來た私達(日本)の文化感覚によつてそれを採る」事の良しとして、それを薦めてゐるのである。続けてこのやうにも言つてゐる。是非以下文章の「英仏」に「独仏」と置き換へ、今回「イラク戦争」での独・仏の採つた選択肢を考へてみると、反米の行為のやうで本質は違ふのが解かる。

「英仏はアメリカの先進国であつた面子や、そのインタナショナリズムと自己のナショナル・エゴイズムとの相克の為。今後もそれぞれの立場から色々な形で離反集合を続けるでせうが、この自由世界の分極化も単に現象的なものに過ぎず、結局はアメリカのインタナショナリズムの掌から出られぬものと思ひます」

福田恒存は將に見事に、欧米文化圏の伝統的本質を見抜いてゐる。40年を境にした異なる戦争は、ただの現象的相異にしか過ぎず、故に40年も前の福田評論の本質論は時代を超越して未だに新しく、現在の混迷日本をリードするものがある。

先日終わつた「シーアイランド・サミット」の、『拡大中東構想』政治宣言の内には、かう謳はれてゐる文章がある。(産経新聞:平成十六年六月十一日記載)

「1. 提案する価値は、人間の尊厳、自由、民主主義など、普遍的なもの」と。

此処に上記恒存の考察が正鵠を射てゐるのを読み取る事が出来る。即ち彼等特に米英独仏が選択せんとする「欧米の伝統であるアイデアリズム」の普遍的追及と言ふ姿勢を。

彼らが提案する普遍的価値としての「人間の尊厳、自由、民主主義」とは、取りも直さずキリスト教精神の客体化であり、それは恒存が言ふ所の西欧近代精神、「神に型どれる人間の概念の探求」なのである。彼等は暗黙裡に自分達の価値観(西欧精神が創出した近代化)を承認し合つてをり、その普遍的國際性を毫も疑つてはゐない。何故ならば「欧米は一つの歴史(注:キリスト教精神)を共有してゐる」からである。「近代化」は歴史の必然との合意がそこにはあり、緩急の差があつても中東にもそれは適応されて然るべきとの彼等共通の信念が読み取れる。

にも拘らず彼等は「インタナショナリズムと自己のナショナル・エゴイズムとの相克の為。今後もそれぞれの立場から色々な形で離反集合を続けるでせうが、この自由世界の分極化も単に現象的なものに過ぎず、結局はアメリカのインタナショナリズムの掌から出られぬものと思ひます」と恒存は見抜いてゐる。

それは何故か。「アメリカ人はそれ(注:ニューインタナショナリズム或はパックスアメリカーナ)に自分達の過去の歴史を賭けてゐると同時に、その延長線上に広義の近代化と言ふ実験を賭けてゐる」からである。その事を独仏も「同一の文化共同体」として知つてゐるからではないか。

~~~~~

その他参照文:『日米両国民に訴へる』より

「共産主義の方が資本主義よりも先に進んでゐるといふ日本の知識人の考へ方も、その意味では同じ国家主義の枠から抜け出られぬ宿命的なものと言へよう」

・・・とは。明治以来、日本は西欧化・近代化即ち先進国化以外の何の国家目標も存在しなかつた。さうした先進国願望の宿命的関係によらしむるものだと、恒存は言ふ。故に「自由世界といふ國際主義的連帯感は殆ど馴染みのないもの」であつたと。即ち前文における、米英独仏が持つ西欧精神の強靭性。それへの日本の適応は、今回「イラク戦争」では、未だし附け焼刃の感から免れ得ないものがあると言ふ事になるか。以上